



2009年7月発行

光あれ

「神は言われた。『光あれ。』こうして光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。」

(創世記1章3～5節)

神は天地を、何もないところ、すなわち無から創造されました。神の言葉によってです。神は「光あれ」と言われました。そうして光がありました。神の言葉によって出現したこの光とはいったい何でしょうか。

まず思いつくのは、これが太陽の光だということです。しかし14節以降に神が太陽や月を創造されたことが書いてありますので、わからなくなってしまいます。「神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた」(1:16)。5節では昼と夜の交代が語られていますから、その光はどうしたって太陽と関係がなくてはなりません。

聖書の研究者によりますと、創世記1章を書いた人は、神の促しの下、古代人なりによく考えて書いているそうです。それなのに、なぜ同じことが繰り返されているのかという疑問が出てきます。そのため、初めの方を光そのもの、あの方を明かりだとする考えが提唱されていますが、結局のところ誰もが納得の行く説明は今日までありません。ただ聖書が、神がどういう目的をもって天地を創造されたかを書いている書物であるところから、そこに信仰的な意味があることが想像されるのです。

私たちはここから、光が神の被造物であることを知ることが出来ます。多くの宗教で、光や太陽が神だと信じられていますが、聖書は光といえども神ではなく、神の言葉によって造り出されたものにすぎないことを教えています。

ただ光は、混沌とした世界の中に神の言葉によって初めて出現したものです。やはり私たちにとって何よりも大切なものです。そのことは、光なしに神のご支配なさる世界はなく、そのことはまた人間の生き方にも関係していて、私たちが光を内に持っていないければ、人として本当に生きているとは言えないというところにまで、つながっていると考えられるのです。

聖書全体の中で、光という言葉は大きな役割を果たしています。「神は光であり、神には闇が全くない」(1ヨハネ1:5)。これは光が神の被造物であることと矛盾してはいません。「神は愛である」という言い方と同じで、神の働きを光に例えたものと考えられます。同じようにイエス・キリストも「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(ヨハネ8:12)と宣言されました。

こうして次に私たちに向けられた言葉が出てきます。「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています」(エフェソ5:8)

何ともったいない言い方でしょう。私たちに光になるよう努力しなさいというのではなく、もうすでに光となっていますと言われるのですから。しかし、これが福音なんですね。私たちみな、多くの欠点をかかえ、まとわりつく罪の中で生きていますが、そんな私たちでも、光であると言って下さる方がおられるのです。

「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています」。だからこそ「光の子として歩みなさい」(エフェソ5:8)という教えを受け入れることが出来るのではないのでしょうか。

人間の中には暗闇を好む心がありますが、神は光の中に私たちを置いて下さっています。そのみこころに応える人生が私たち一人ひとりの上にありますようにと願います。

(2009年6月28日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊